

【患者さんの訴えに耳を傾けること】

患者さんは、病室でいろいろなお話をされますね。例えば、肩こりの訴えを聞くと、西洋医学的には心筋梗塞の診断の手がかりにもなりますし、胆石症を疑うこともできるでしょう。あるいは、脳の血管造影をして、循環不全を指摘できることもあるでしょう。ただ、全体としてはそういった器質的な疾病を背景にする可能性は低いわけです。ですから、たいした病気がないとわかると「ああ、またこの患者さんこんなこと言ってるわ」で片づけられてしまうことが多くなります。でも、漢方を手がけていると、どんな些細な訴えにも耳を傾けることができるようになります。何故でしょう？それは、肩こりという症状は同じでも、具体的な訴えに対応できる手段があるのです。

患者さん A 「どのあたりって、先生、もう首全体がこりこりです」

先 生 「それは葛根湯（かつこんとう）でしょう。」

患者さん B 「頸から両肩にかけてとにかくこります」

先 生 「なるほどね。では、桂枝湯（けいしとう）を出しておきましょう。」

患者さん C 「頸から背中にかけて棒が入っているようですね」

先 生 「わかりました。Cさんには、柴胡桂枝乾姜湯（さいこけいしかんきょうとう）がいいでしょう。」

なんでそうなるの？と、どうもなじめない方もおられるでしょう。実は、私もそうでした。しかし、こういった法則は、先人が漢方の古典を学ぶ中から実際の臨床経験（経験則）に基づいて残したもので、「原則"理屈"だけではない」漢方治療のワザともいえるものでしょう。「なるほど、いろんな治療があるんやなあ」という程度で受けとめていただくとよいと思います。

様々な訴えに対応できるのが漢方治療のよいところ、と述べましたが、それは決して不定愁訴に漢方がよいといっているわけではありません。患者さんの抱えている問題を解決する手がかり、癒しとなる手段を多く有することを強調しておきたいのです。中には「漢方なんていっつも効かへんで」とおっしゃる方もおられるでしょう。でも、最初の処方はどうであったか、何が効いているのか、どこが効いていないのかを治療する側と患者さんがいつも考えながら前へ進んでいると、振り返ったとき「ああ、やっぱり良く効いてるやん。」ということになるはずです。漢方治療は、一発勝負ではないのです。

【三谷ファミリークリニックのまなざし】

さて、長年私が勤務しておりました大阪市住之江区の加賀屋病院では、診療所時代も含めて発足以来 40 年以上、漢方を中心にした医療ということで、患者さんが東洋医学の考え方をよく理解してくださっているのがうれしかったです。ところで、一般の西洋医学的診断および治療では、患者さんと接する場合、あまりにも「身体的な病気」に注意が向けられていますね。

例えば胃が悪い、心臓に問題がある、いや膈臓が原因では？というように、局所的な所見、人間の身体の一部の問題で全てを説明してしまおう、という傾向になってしまっています。そして、その人が社会的な存在であることや精神的な苦しみがどうなのかに残念ながら関心が薄いことが多いようです。患者さんを社会的な存在とみることは、私たちのクリニックの大切な視点です。

【東西両医学の考え方 人間をどうみるか】

西洋医学の歩みは、個々の事物をそれぞれ別々に、他と独立させて関連性を意識せず認識しようとしてきました。これは、科学（サイエンス）として「個を知らずして全体像は把握できない」という考え方が基盤になっていますから、正しい側面をもってたといえます。しかし、こういった方法で認識された「個」を、固定化したもの、静止しているもの、その人の全体から独立したものとみなしてしまうところから問題が生じますね。なぜならば、人間は、いつも動的な存在だからです。時間的にも、空間的にも決して一つの地点には留まっていません。

一方、東洋医学はどうでしょう。個々の分析よりも結合、つまり「全体」がまずどうなっているのか、をつかむことから治療がスタートします。これが「証（しょう）を把握する」ということです。私たちが患者さんといろいろなお話をしながら脈を診（み）、舌を診、おなかをみるのは、「患者さんの証をつかむ、東洋医学的に理解する」ためです。いずれにしましても、「個」も「全体」も共に患者さんを治療していく上で決しておろそかにしてはいけません。個々の意識を大きな全体的なものと結びつけ、一つの運動体として理解される時に、将来の医学の発展があると思います。どちらが優位か、が問題なのではなく、人間に役立つ医療を目指すという観点が大切です。

東洋医学を専門とする私たちは、まず「全体像」をしっかり見据え、西洋医学的な分析（血液検査のデータや画像診断）を判断材料としてしっかり活かすことで、患者さんにとって本当の意味での東西両医学が役に立つことになると考えています。

【「未病（みびょう）ヲ治ス」という考え方】

私たちの基本的な姿勢の一つに「未病を治す」ことが挙げられます。中国の古典に「聖人ハ已（い）病ヲ治セズシテ未（み）病ヲ治ス、己乱ヲ治セズシテ未乱ヲ治ス」という一文があります。つまり、すでに病気が成立してしまってから（病気になってしまってから）、あれやこれや必死になって治療するのではなく、現在はまだ病気とはいえないけれど、何となく元気のない時期にうまく適応できるように生活全般の指導を丁寧にしてゆきましよう、そしてそれが根本的に病を治すことなのですよ、ということが述べられています。

私たち医師は、「患者さんを診察して、お薬を出す」ことだけでは、治療を行う立場としては不十分なのです。「治療」は、お薬をお渡しするだけではなく、食事のことや運動のことも丁寧にお話ししていかないとはいけません。